

## ■特別講座

## シンポジウムの記録

出席者(敬称略)

辻井 達一:財団法人 北海道環境財団 理事長

小林 英嗣:北海道大学大学院工学研究科 教授

若見 雅明:黒松内町教育委員会 教育長

榎井 孝 :黒松内中学校 校長

小林先生(司会): それでは、3名の方と私とで1時間ほど時間を頂いて、「黒松内における学校のエコ改修と環境教育」というちょっと難しいテーマでお話したいと思えます。

中学校の改修をどんなふうにか、それをまちづくりとどうつなげていくか。つなげていく目標像はどのように考えたか、黒松内らしさが出てくるのか。あるいは町の方と行政の方がどんな風に連携してやっていくのか等、ということについてお話を聞かせて頂ければと思っております。教育長は、先程全国で10カ所が手を挙げてスタートして、それぞれが独自に展開して行くとおっしゃっていましたが、そもそも、なんでこういう「エコ改修事業」に手を挙げたのか。たぶん作戦がおありだったんだろうと思いますが、そんなことを含めて、言えない事は結構ですが、是非思いをお聞かせ頂ければと思えます。

若見教育長: 今回の黒松内中学校、隣にあります小学校、体育館、学校給食センター等、これらは建てられてから27年前後経っていて、大変老朽化しています。中学校は体育館の窓枠がかなり傷んでいて、来賓の一人として卒業式等に招かれるのですが、生徒達も寒さに震えているという現状も最近はお出で参りました。

私たちの町のキャッチフレーズは、「自然にやさしく、人にやすらぎのいなかづくり(町)」ということなのですが、18年の間北限のブナに代表される、地域の様々な豊かな自然を活用して、大切にしながらまちづくりを進めてきたということです。具体的には地球温暖化防止法案の国際フォーラムを3度ほどやっていますし、平成7年

には環境基本計画、ISO取得、現在も省エネやリサイクルに取り組んでいます。温泉だとか、ブナセンター等様々な交流施設もありますけれど、それらも、環境、健康、教育、交流という4つの系を大事にしながら、施設整備を進めてきました。現在では年間に16万~20万の方々が訪れる、その中でも私たちは、自然の中で時間を楽しむエコツアーというものを大切にしてきたわけです。

先程小林先生の方から生涯学習社会についてのお話がありましたが、私共も学校というのは、子供達が生涯学習社会を生きるための基礎教育を学習している場だという認識をもっていますが、果たしてそういう観点で現在の小学校、中学校を見たときに、黒松内町のまちづくりのスタンスが、完全に遊離して、古くなってしまっていたり、また新しい時代のニーズにもマッチングしていなかったりという状況です。建物だけではなく、教育も時代に応じて変えなければいけない部分もあるという、そういう事から、エコスクール的な要素と今日的な学習理念への対応ということで、早期に改善を必要とする状況にありました。

昨年の4月に地震調査委員会があった時にショッキングなレポートが出されました。活断層による直下型地震の確率が道内で一番高いということ(が報告され)、耐震補強が緊急な課題となったわけです。中学校は老朽化も激しくて、断層に近いといったこともありまして、最初に手がけることになったのです。私共としては当初文科省の補助金を頂いて、最初全部建て替えようといった思いもありましたが、建てて40年程経たないと全部の建替えはできないということが後からわかりまして、そういう点

では、エコスクール化は半ばあきらめていましたが、アクさんからエコ改修補助事業の情報が舞い込んできて、最近ではアスベストの改修も加わることになったのですが、そういったことでやることになったわけです。それが動機といえば動機です。

実はこの改修事業というのは、検討会をやったりプロポーザルをやったりと、正直申しまして非常にやっかいなもので、私自身が躊躇しました。しかし、私共の職員の「この仕事は環境建築技術者の養成、あるいは地域の子供達への環境教育を実践するということで、ぜひこのチャンスに黒松内町でやりたいんだ」という強い意欲に触発されて始めることになったわけです。文科省と環境省という二つの省庁の事業ですから、事務量も多いのですが、お金の面でも大変有利だし、内容面でも大変良いということではじめました。

庁内にプロジェクトチームというのができておりますが、教育委員会というのは実はこの時期、先生方の人事だとか色んな面で忙しいのですが、どうするのかなと内心困っていたのですが、総括事務局と運営事務局という2局体制を取っていて、あれよあれよという間に今日のシンポジウムを迎えたという感じです。このように今まで出来てこられたのも、辻井先生、小林先生、アドバイザーの先生方、校長先生をはじめとする関係者の皆様、今日お集まり頂いたメンバーの方々、地域の皆様のご協力があったことだと思っております。全国で10校ですが、一番早く進んでいるということですから、うれしく思っている次第です。現在そういう気持ちでおります。

**小林先生**：ありがとうございます。きっかけはいずれにしても、子供達の教育を受ける場の質を上げることが一番の原点で、庁内の協力体制の元、幅広にスタートして、これまでの環境政策といかに結びつけて行くのか、さあここからどうしようかという所も含めて、後ほどご意見をいただければと思います。

梶井先生、突然「こういう改修をするよ。

協力してほしい」と多分言われたと思うのですが、学校としてはどうだったのか、それから実際に学習会をやられて、その時実際に先生方はどんな風に興味を持たれていたか、子供達はそんな先生方を横目で見ながらどういう様子だったのかを少し話して頂けるとありがたいのですが。

**梶井校長**：私の方からも改めて、お集まりの保護者の皆様、地域の皆様に黒松内中学校エコ改修事業に、ご協力頂いていることを感謝したいと思います。今お話のあった改修についてですが、正直なところ突然の改修と言うことに驚きました。それと同時によくよく話を聞くと、期待だとか、言葉は悪いがノルマを課せられることを、ちょっと心配しました。それから、今の校舎で勉強しながらということで、反対側に新しく新校舎が建っていく状況を見ながらということであれば、もう少しリラックスして考えることができると思うのですが、エコ改修ということで、環境教育を進めると言うことは、正直、大きなノルマを課せられたような気持ちになります。でも、皆さん色々経験あると思うのですが、何かこれをしてしなければならないという時に、どんな気持ちでスタートするかということを考えてみたのです。年末に32時間耐久レースを見ましたが、あれと同じで、自らの目標ををもって進まない、負担になったり重荷になったりします。

そもそも、そういう意味では、うちの学校が改修されるというのは大変うれしいことです。かなり老朽化もしてるし、耐震的にも問題があるし、アスベストの問題もある。そういうことではすごくうれしいと思っています。そこで期待に応じて全国で10校、しかも北海道で1校、雪国の校舎を改修するということでは道外からも注目されると思うのです。そういう意味では私はむしろ光栄だなあと思うし、改修できた暁には色んな北海道の地域から見学に来て、そのノウハウを習得して頂ければいいと思っています。もうひとつは、今もう直面している問題なのだけれど、ますます今の子供

達が社会に出て行った時に、環境・エコの問題が、今以上に限られた地球の資源の中で、自分たちが自ら大人として解決したり、参加したりして行かなければならなくなる、そういう意味で子供達が生きた学習をする必要がある、そういうことも可能になるし、私にとっては幸いな事だと思っています。

しよった荷物は重たいのですが、生きて働くものであるということで、ぜひこの事業、精力的にがんばっていきたくて思っています。期待されたりすると言うことは、その後に子供達も町もそして我々も、成長があるのだと思っています。だからといって、あまり肩に力を入れすぎて、終わってから何も残らなかったな、ということがないように、今から身の丈にあった取り組み方をしていきたいと思えます。それが終わった後に、快い疲れとの満足感や充実感を味わえるのではないかと思います。そんな風に受け止めています。

子供達はどうかということですが、子供達は、まだ見えていません。我々が今、検討会などで勉強して、その後に、環境教育ということで、具体的にプログラムを作って、いよいよ子供達に提示していくわけです。

では先生方はどうかといいますと、皆それぞれ期待もあるでしょうし、実際私達は中学校の教師ですから、皆それぞれ専門がありますが、「環境」という専門の先生がいません。でも、風や空気や温度の話を知ったり、実験することによって私達自身がとても興味をそそられるし、勉強になっています。今は私自身が子供達に向かって授業をする機会があまりないのですが、これからは「こんなことを一緒にしたいな」ということもありますので、これからはそういう機会が増えて行くと思えます。まずは、職員も含めて、私達自身が環境教育を楽しめるものにしたいなと思うし、実際に子供達と一緒に「楽しいな」と思えるような、そんな思いで進めていけたらなと思っています。

**小林先生**：ありがとうございます。先生方が楽しみながらスタートされている反面、小学校・中学校の先生はやらなきゃいけないことが山ほどあって「大変だな」とも思えます。

子供達もそうなのですが、小学校・中学校の環境教育が加速されて、地域にとっての新しい力、動きになるように期待したいと思えます。お忙しいのは承知なんですけど、ひとつお力を注いで頂ければと改めてお願い致します。

地域の力というのは色々な所から発生していくのだと思えます。それで、目に見える、影響力の大きい、それと係わることの大きいのが中学校だと思えますので、よろしくお願ひします。

生涯学習というものをどう考えているのかは後で伺いますが、幅広い意味で、環境と共存した黒松内の、全国へのメッセージが、改めて出てくるのだと思えます。

先程辻井先生のお話の中で、エコスクールというのは、かなり幅広く考えられるというお話と、ブナ林を中心としたエコスクールというお話しをしていらっしやっただと思うのですが、少しお聞かせいただけますか？

**辻井先生**：私は植物屋ですから、学校の建物などについてはわかりませんが、例えば外側から固めて行くのもひとつの手ではないかと思えます。

黒松内はひとつの状況としてブナを持っている、ブナを全面に出すことを考えると、学校にブナ林があってもいいわけです。直径60センチ位の幹で、高さ20m位あるブナの木に含まれる水というのが、約6 tあるということです。6 tということは、一辺1 mの四角で、高さ6 mの水の柱に相当するわけです。その中を抜けてくる風というのは、全部がフィルターになってくれるわけではないと思えますが、夏で言えば温度を下げる効果もあるし、湿度も供給される、風がどっちへ吹くかということは風まかせですが、ものすごく良いラジエーターになり得るわけです。そういったことも含めて、

物理的環境も含めて考えることも良いじゃないかと思います。町の中に、町のどこかに並木があるのが特徴だというだけじゃなくて、学校環境そのものに、そういったものが取り込まれるというのもひとつの方法じゃないかと思います。それは、別にそのためだけの植林ということじゃなくて良いわけです。

仮にもエコスクールでやるんだったら、風はその時どういうふうにあけるのか、冬はどんな雰囲気になるのかといったこととか、そういうことを実践したとしたら、それは明らかにエコスクールのひとつの素材になり得るのではないだろうかと思います。

それから、今はブナの木にちょっと執着して話をしたのですが、木に限らず、学校の校庭というのは大抵砂埃が舞っています。昔の練兵場の名残りみたいに。ああいうのは日本以外どこでも見たことがない。でも、例えばサッカーだって本来芝生の上でやるし、野球だって本来は芝生でやります。テニスだってそうです。日本だけじゃないかと思うんですね、ああいう砂埃の立っている運動場というのは。

札幌市内でそういう関連の事をちょっと手伝ったことがあるのですが、新しい小学校を作るといって、総論賛成で近くに住んでいる人達は、自分の子どもが近くの小学校に行けるようになるから良いと思うのですが、敷地のすぐそばになりそうだという家は反対するのです。砂埃が入ってくるからです。だから総論賛成で、この近辺にできるという、みんな学校の校庭から砂埃が入ってくるのはいやで、「ここだけはやめてくれ」というのです。

ですから砂埃がたたないようにすればいいわけですね、学校の校庭から。わけないことなんです、じゃ、誰がその手入れをするのかという、学校の先生が「そんなのやらせられたら大変だ」ということになってくるというケースが、少なからずあるのです。それはやっぱり地域がカバーしないと、お金もないわけですからできないのです。でも、今そんな手入れならやって

あげると言う人が結構いるのですから、そういうことをすると良い環境ができるわけです。僕は基本的には、わざわざお金をかけてビオトープを業者に造らせるなんて事をする位なら、その方がずっと環境教育ができるのではないかと思います。

緑の環境の中で、教育を受けるということがとても重要です。そうすれば、そこにどういう植物が生えてくるかとか、どういう虫がやってくるかとかを見ての方が、よっぽど環境教育になると思います。つまり、私は環境教育なんていうのはどこでもやれることだと思います。ただし面白くやろうとするんだしたら、その辺の特徴をつかめばいいわけですね。例えば釧路だったら湿原を中心に考えていってもいいわけですし、川のある町なら、川をうまく使ってもいいわけだし、ブナ林があるんだしたらブナをうまく使えば良いと思うので、特別なことをやるわけではないのです。ただし、うまく土地の材料を、活かして使うことを考えれば、非常に面白いものができるし、生徒もそれに乗ってくると思います。

だから、ちょっと先程考えていたのですが、せっかくブナの里に居ながら、例えばブナ林に生徒を連れて行く先生もいらっしやると思うんですが、そこへ行けば「これがブナ林なんだ」「これがブナの木なんだ」ということを認識したり、教わったりするんだと思うんですが、町中にブナの木が一本植えてあったとして、「これがなんの木かわかるか」と聞いたら「怪しいものだ」と答えたという話があります。学校側でも、「これがミズナラで」「これがブナで」「これはニレで」と色んな木があって、その中にブナがあると、初めて子供達も「ああ、これがブナだ」と認識するわけです。そういう仕掛けをつくっておかないと、ブナの里だから、じゃ子供達がみんなブナの木を知っているのかという、あやしいものです。

そしてそれが「材」になるともっとあやしいです。それこそ、建物の、今ブナ材で学校をつくるなんていうと、それだけの材がないんじゃないかと思うんですけど、ど

っかで、壁の板か、床なのか、テーブルなのかわかりませんが、「これがブナだ」というのを体験させることが、これも又環境教育なんじゃないかと思います。

何か特別なことをやるんじゃないかと、せっかくブナ林にあるんだから、今申し上げたように、外も内もどっかでブナに触れて、黒松内中学を出た子はみんなブナを知っていて、どっかよそへ行っても、ブナっていうのはこういうもんだという講釈ができるようになるのが、黒松内における環境教育なのではないかと、そんな風に思うのです。

**小林先生：**冒頭、光とか風とか話されて、多分今までの検討会では、建物の中でどういうふうに風が流れるかとか、光が入るかという話が重要視されてきたと思うのですが、学校というのは建物だけじゃなくて、全部、中も外も周辺も含めて、学校です。そういうなかで、建物の外側の光とか風をどう考えるかも大事だと思うわけです。

昔、私が使っていた大学の研究室の外に大きな銀杏の木がありまして、夏暑くなる頃に葉が繁って、日が遮られて涼しくて、すごく評判が良いのです。そして冬になると葉が落ちるから、冬は教室の中まで日が入って暖かいのです。やっぱり子供達も同じで、外から見たときにどんな風に見えるかとか、風が入ってきたらどんな感じだとか、光が入って来たらどうだということなんかを体験した方が良いのかなあと思います。

そしてまた東京の子供達なんかは、春の入学式には桜の並木を通ったりというようなこともあります。それから、小学校・中学校時代の校舎の思い出というのは、皆さんもそうだと思いますが、先生の講義や授業を受けた教室なんかは全然覚えていなくて、校庭の片隅だとか、学校に行く途中の並木だとかそんなことの方を覚えていると思います。そんな意味で黒松内の子供達に、黒松内のブナ林のことや、世界的に共通の仲間がいるよということや、子ども達に刷り込まれた黒松内の記憶というのをどうやって作ろうかということを考えるのはすご

く大事だなあとと思います。

そして写真などですぐに「これが黒松内中学校だ」という特徴のある校舎の形じゃなくて、生徒達にとって、特徴ある環境をどうやって創っていったらいいかということを考えることは非常に大事だと思っています。

それで、教育長、町全体の小学校、中学校の基本は教育委員会でお考えになっていると思いますが、生涯学習ということで、それ以外の大人や、PTA、OBの方とかを含めて、今後どんな風に中学校の、あるいは小学校もして行くんだと思いますが、環境自治体とおっしゃいましたが、どういうものをさらに厚みのあるものにしていこうとお考えですか？

**若見教育長：**この事業がどういう風になっていくのかなあという期待の方が大きくて、私自身には、こうなってほしいという具体的なことはないのですが、ただ願っていることは、学校が本当に子供達の居場所であってほしいなと思います。

そして座学の環境教育ではなくて、普段の学校生活の中で実践を通して環境教育が行われる場になればと思っています。もちろん先生も生徒も一緒になって、地域保護者を巻き込んで、学校が環境教育をリードしていく、新しい町のあり方をイメージしていくという、そんなことが私の思いとしてはあります。しかし、それも刹那的なものではなく、ブナの木が育つようにゆっくりと大きく、大地に根ざして頂きたいという思いがあります。

それから辻井先生おっしゃいましたが、学校の中に手作り感がある、たとえば本物の木で作った大きなテーブルとか椅子があって、子供達みんなの手あかがついて、30年経っても、50年経っても変わらないものとして残っている、そういう思い出に残る本物のものが、スチールとかプラスチック製のものではなくて、本物の地域にある素材を活かしたものがあればいいなと思います。

教育方針というのは、毎年作るのですが、先生方に必ずお願いしているのは、黒松内町にはブナ林があるけれども、それはそのブナ林を守ってきた人がいたから、切らないで守って来た人がいたから、それで現在私達も豊かな恵みをいただいているし、様々な資源を頂いている。ブナ林があったから様々な交流があって、その中で様々な知恵を頂いて共生している。これは単に自然との共生というだけではなく、人と人が支え合う共生と言うことです。そんなことを大事にしましょうという、そんなことを教育の中にぜひ入れて頂きたいということです。そんなことは私がいう前に先生達がちゃんとわかってくれています。

もう一つは今学力のことが大変重視されていますけれど、なんととっても教育のひとつの大きな役割というのは、豊かな人間性を培うということです。その中でもどうしても「自立と共生」というのを育てて頂きたいと思っています。そのためには多様な命との直接的な触れ合いというのが大事だと思うのです。是非授業の中に、活動の中に、工夫して取り入れてほしいということで、これは今実際にやっています。

行政としては、そのために、例えば環境ですとブナセンターという所に、学校教育部の自然体験のサポート体制というのがあります。それから総合学習の取組みにも支援して頂いたり、色々なことをやっていますし、うちの地域の特性としては特別に支援をする子どもの数が多いのです。そういった子どもを支える環境、そういったことをより機能発揮できるような施設改修になってほしいなと思っています。

自然と人の関わりだけじゃなくて、人と人との関わりが支え合うような関係、そういったことですね。キーワード的にいうと「自立と共生」といったことや、多様な命とのふれあい、木のように育ててほしいとか、そんなようなことを勝手に思っています。

あえて付け加えるとすれば、ブナセンターやトワベールや自然の家が、子どもの写生会のテーマとなって、学校に貼られます。

間違いなく私が役場に奉職した頃にはなかった、新しい風景になっています。図書館のガラス越しに見える親が子に見聞させる姿というのがマナベールという図書館ができたことによって見られます。これも風景です。学校給食で、地元のトワベールで出来たハムやチーズのバイキングをする、そういう以前なかった風景や風味が今はあります。

私は黒松内にはすばらしい風景、風土、風味が感じられる季節あると思っています。このエコ改修によって黒松内中学校が、子供達の新しい風景になってほしいなと思っています。また、そこから風味や風土が感じられるきっかけになってほしいなど、ちょっと抽象的ですが思っています。

**小林先生**：ありがとうございます。変な質問ですが、別に黒松内だけじゃないのですが高齢者の方がいらっしゃると思います。そして、養護、介護とかそういう状態になった方もいらっしゃいますよね。そういう方の中に、知恵と力と時間をたくさん持っていていらっしゃる方がいらっしゃいますよね。そういう方達と、中学校をはじめとする「教育の場」との関係何か作っていかうというお考えはありますか？

**若見教育長**：実際には、地域の知恵を持っている方、特殊な能力を持っている方を、外部の講師として受け入れることはどんどん進められております。そういう形は私たちも願っていますし、先生方も率先して時間のない中工夫して、教育委員会の方にも「こんな人材はいませんか」というようなことで、たくさんの先生から問い合わせが来ます。私たちはそれに対して状況提供しておりますけれど、そういう形は、エコスクールの中でも是非そういった高齢者の知恵だとか能力だとかを活用していければと考えております。

**小林先生**：環境自治体の厚みみたいなものが、非常に楽しみだなあと思っています。そういう議論を19日のワークショップ等を取

り入れていって欲しいなと思っています。

さて、校長先生、先程「びっくりしました、驚きました」ということで始まったのですが、多分色々、あれこれ夢をふくらませていらっしゃるんじゃないかと思うのですが、それをお聞かせ願いたいのと、先生方の意見みたいのが少し束ねられてきているのならそれをお聞かせ願いたいと思います。

それから、私が余別の小学校の改築の時に、PTAの方達や、元PTAの方と何度か話をしたんです。そうすると「小学校に来たい」というのです。「訪れたい」と。ただPTAじゃなかったりするとなかなか来づらい。でも、きっかけがあると、絶対来られると。具体的に聞くと、カラオケしたり、麻雀したりできるスペースがあったらとか、料理をつくって子供達と一緒に食べたりしたいという話をするのです。何かきっかけがあると私達も行って応援してあげたいという希望を持ってらっしゃる方が多かったのですが、そんなことが黒松内では先生の耳に入ってきているのかなということをお聞かせ頂きたいのですが。

**榎井校長：**後の方の話なのですが、子育てが終わって、子どもを学校に通わせることなくなった地域の方が、学校に来る機会というのはありません。

それとは別に、総合的な学習で、先程教育長がお話ししましたが、地域の人材活用ということでは、積極的にこちらからお願いして、協力してもらっています。

また子供達も地域に対して、そこで何かを学習したりしているのですが、なかなかふらっと遊びに来るとか、ちょっと学校の行事に行ってみたいかなという風にはできていないですね。

併せて、小学校の親というのは、皆さんも経験あると思いますが、結構学校に行くのですが、子供が中学校になると「来るな」とか「来なくても良い」とか子供も言うようになるし、だんだん中学校になると、なかなか足も遠のいていくような気がするのですが。

しかし、私どもも職員と一緒に色々な事をやっているのです。だから是非来て、見て欲しいのです。見て、そして子供達の教育とか、私たちの教育とかを評価してもらいたい、又は意見を言って欲しい、地域の人にそういう風に見てもらいたいというのが、偽りのないわたしの願いです。

ですから、もっと敷居を下げて、学校に来てもらうと言うことでは、今回のエコ改修によって、学校がリニューアルされた時に、それと同時に(中学校に)行って見ようかということが起爆剤になって、もっともっと機会を増やして、私たちの子供達を含めての活動を見てもらえたらいいなと思っています。そういう点でも期待が高まります。

それから、前半の方の「どんな学校であればいいかな」ということでは、職員も先日ニセコ中学校に視察に行って、それぞれここはちょっとまねしたいなとか、ここはちょっといやだなとか色々な考えを持って、私自身も持っています。私自身も自分の家が建つようなそんな感覚でとても期待しております。

大雑把に言えば、外観は父親のような、強く逞しく、頑丈であるという感じがあればいいかなと思います。外観というのは顔ですから、何十年もそこにあるので、そういうことも大事だなと思います。

それに対して教育というのは普遍的な部分と流行の部分というのがあるので、そういう流れに柔軟に対応できるような、(母親のような)やさしさと柔軟性があるような中身ができればいいなと思います。

少なくとも子供達にとっても私たちにとっても、快適な校舎は絶対的に教育効果を上げます。だから、期待しています。教える教師も今まで以上にやる気を出すし、学ぶ子供達も今まで以上に学習意欲が旺盛になります。これは普通に考えてもそうですよね、老朽化した家から新築の新しい家になると、がんばろうという気持ちになりますよね、それが大いに期待しているところです。あと、具体的なことに関しては、

まだまとまっていなくてはっきりしたことは言えませんが、そういった感じです。以上です。

**小林先生**：お父さん、お母さんの話が出ましたけれど、あと40年50年、がちっと使っていきますから、ずっと住み続けられる、ずっと続いてきた黒松内の教育方針のようなものを示す部分と、フレキシブルな子供達に対応して行けるような「しかけ」というもの、それは先程辻井先生の方から色々校庭も含めて、直径60cmや1mのブナの林がある校庭というのも過去にはないわけで、そんなことも含めながら期待感が高まるわけで、是非これからのワークショップに向けて職員の方をたくさん集めて、こうしたいああしたいという意見を出し合って頂ければありがたいと思います。

あと教育長、今校長の方からは建物の外観などについて、意見を頂いたのですが、先程の辻井先生の方から校庭の話なども出ていましたが、その辺に関して教育長のほうから、なにかご意見ありましたらお願いします。

**若見教育長**：うちの職員が困った時に使って下さいと資料を用意してくれましたので2, 3紹介します。

辻井先生のお話、私も本当に同感で、心の中で拍手を送っていました。箱もの、要するにコンクリートでつくったものというのは風化して、年輪を感じるのだけれど、一方でブナの木などは、年数が経つとどんどん成長していきます。生きていくという意味では「いいなあ」と思うわけです。

それと今「食育」ということが大変大事にされています。給食が楽しくなるような会が今年間4回しかないのも、そういった多目的なランチルームなんかもあったらいいかなと思います。

また、ビオトープという話に触れられましたけれど、ともすれば、建築屋さんとか技術屋さんをお願いしてつくと、そこだけ突出して目立とうとする、意図的に。

しかしそうではなくて、昔からあたたかもそこにあったかのように存在して、より風景が豊かになるような感じがいいなあと思います。そして周辺のビオトープも、周りの農地などと違和感のないような、連続性をもったものが良いと思うし、竣工した時に完結してしまうのではなく、みんなで木を植えて、みんなで育ててきて、3, 40年経ってひとつの風景ができるというのもいいなあと思います。

もちろん内装では木をふんだんに使って頂きたいと思いますし、地域の方が利用して、子供達の卒業を祝う会なども一緒にできることを期待していますし、フレキシブルに活用できるような、自由度のあるスペースづくりなどがあればいいなと思っています。

もちろん、風や光については、過去の事例などもありますので、参考にして頂きたいと考えております。

**小林先生**：(辻井)先生、先程のご提案、中学校のあり方その1というのはございましたが、その2というのはなにかございますか？

**辻井先生**：その2ということでしたら、先程若見さんがおっしゃっていましたが、「活断層」がありますよね。僕もこの間知ったのですが、トワベールの前を(活断層が)走っているのです。で、そのずーっと延長上に黒松内中学があるんですね。ですからこの活断層上にずっとブナの木を植えていったら、もし地震が来たときにどんな風になるかなと思うのです。どんな風に倒れていくのかなあと。別に地震を楽しみにしているわけではないのですが、僕が知っている限りで地震でブナが「曲がる」のはあるけれど「倒れる」までは行かないので、もしかしたら倒れるブナを見るチャンスかもしれないと思うんです。ですから、活断層もうまく組み込んでみたら面白いかなと思います。めったにないチャンスです。

それがひとつで、もうひとつは、これは環境省のということにならないかもしれな

いのですが、良いチャンスなので、先程もちょっと言いましたが、世界中のブナの木の種類ってたいした無いのです。最大に集めても20種類くらいしかありません。頼めば、集めるのはわけないことだと思います。この際20種類位、頼んで集めてきたらどうかと思うのです。ブナセンターに植えるのはもちろん良いのですが、校庭に植えたっていいと思うし、教育としてやるんだったら学校の方が良いと思います。やっぱり、これだけ集まっているところは無いというと、学校や生徒のプライドにもなりますしね。それも、ただ送って下さいというのではなく、生徒を行かせたら良いんだと思います。たいした金もかからないのではないかなあとと思います。そういうことも含めて考えられたらどうでしょうか。

それと最後に、これは小林先生のお話に触発されたようなものなのですが、北限のブナ林というのは大変宣伝しやすいですね。私は白神山地のよりは、あそこのブナ林はまとまっているというので世界遺産になったのですが、北限とか南限というのは非常に宣伝しやすい。人間というのは一番はずれというのが好きなんです。そういうイメージで宣伝しやすいから、例えばこのブナ林が天然記念物になったのもそういうところから来ているし、非常に早い時代に手入れをしたということがあり、最近だと北海道遺産に指定されたりとか、さっきも16万人とか20万人とかが訪れるというお話ありましたが、外側へ向けての発信というのは結構やられているのです。しかしながら、内なるものへの発信となると、まだまだそこまでやっている例というのは少ないのではないかなと思います。ですからせつかくのチャンスなのだから、まちづくりにもうまく、そういうことを活かしてみてもどうかなあとと思うのです。先程言った、いっそ世界中のブナを集めてしまえばいいといったのもその一つです。そんなふうにもうまくこのチャンスを、活かしても良いんじゃないかなと思います。

**小林先生**：完成した時に黒松内中学校でブ

ナサミットもいいですね。

ちょっと話が飛ぶようなのですが、韓国とか台湾の人が日本に来る時に、どんどこから情報を得ますか？というのと、新聞でも観光ガイドブックでもなく旅行会社のパンフレットでもなく、ホームページで見るんだというのです。そこで見た内容に惹かれて訪れてくるのだというのです。ですからそういうものを利用していくのもいいなあとと思います。当然ブナセンターなどでもやられていると思いますが、メールをどんどん出して、攻めのIT技術というのをどんどん使って町を紹介をする。それにどんどん子供達が参加していくことができれば、子供達も世界に情報を出していければいいなと思います。そうすると、例えばドイツのどこかの学校と姉妹提携ができたとか、そういうことで随分重要なきっかけをつくるのではないかと思います。

最後に大事なことなのですが、子供達が自信をもって黒松内で居座って、自信を持って黒松内から離れて、離れていっても、自信を持って黒松内を語れるようになることが必要だと思うし、大事だと思うのですが、校長先生や、教育長は、これからどういう事を通して、そういう黒松内を作り上げていこうとお考えでしょうか？

**榎井校長**：私は前から、自分の出た学校を「この学校を出た」と胸をはって言えるようになってほしいと思ってきました。そのために色々な事をやってきました。学校にいた3年間に、教師としての自分が、子供と正面から向き合っていたかということなんですが、逆に言えば、子供の側からすると、中学校の3年間の体験や行事や部活の中で、どれだけ自分を超越することができたのかとか、超越するというのはチャレンジしなきゃ超えられないんだけど、超越することができたかによって、振り返った時に、誇りみたいなものが、先輩から受け継いだ校風に対するプライドのようなものができるよう気がするのです。

現在私たちがやっていることは、簡単に

言うと、総合的な学習というのがあって、やはり「黒松内で学ぶ」ということで黒松内の色々な自然や美しい花、色々な特質を調べながら、「黒松内ってこんな良い所だぞ」ということを子供達に学んでもらっています。それも、子供達が黒松内を卒業する時のひとつの大事なパワーというか、黒松内に誇りをもつということの要素のひとつになると思います。これからもそういう黒松内の良さを、学習の中に取り入れて、子供達が自信持って行けるようにしたいと思います。やがて、黒松内中学校をエコ改修するとすると、色々な人の思いが、校舎の中に願いとして託されて、その中で学んだということ、そしてもしかしたら、辻井先生おっしゃるように、ブナの大木がそこにあった時に、それも一つの強いイメージになって、黒松内はブナの町だよと言えるようになるということではないかと思えます。

うまくいえなのですが、エコとか環境とかだけではなく、子供達が3年間、どれだけ自分を超越ることができたか、そういうチャンスをどれだけ僕らが作ったかということを含めて、新しくできる校舎も含めて、記憶に残るし、誇りを持って行けるのではないかなと思っています。

**小林先生：**ありがとうございます。教育長いかがですか？

**若見教育長：**イメージとしてですが、間違いなく、子供達は仮校舎で忍耐をするわけです。できた暁には、構造から技術集団、技能集団その他色々、全部調べてみたらおそらく何百人という方が関わっておられるのだと思います。その人方を全員写真に撮って、図書室の大きく見える所に飾っておきたいなと思います。

私はこの仕事は、決してやらせではなくて、本当の真実として、黒松内の「プロジェクトX」というものだと思います。そういった意味で、関わった人方、人と建物、それも大事なのですけれど、そこに色々思いを込めてわざわざ札幌からいらして、今

日もこの会議に出られている人もいます。そういった方々の色々な思いを、そんな風に真剣に取り組んだ大人がいたということ、私は残していきたいと思っています。そういう大人がいたんだと言うことを、子供達に残しておきたい。そうするとやがて、彼らが大人になった時に思い出すかもしれないと思います。

間違いなく、新しい種は蒔かれたんだろうと思います。そしてこれが大きく成長するのか、途中になるのかわかりませんが、少なくとも種は蒔かれた。その行く末、それを育てる若い人もここにはいますから、ぜひみんな育てていきたいなあと、もちろん、先程も言いましたが忍耐する子供達も中心において、写真を撮っておきたいなと思っています。

**小林先生：**ありがとうございます。辻井先生いかがでしょう。

**辻井先生：**そうですね、今教育長が「できあがった時に」とおっしゃっていたんだけど、私は作っている過程から、ずっと建設現場を見ているというのも良いんじゃないかと思うんです。それがひとつです。

それからもうひとつは、この学校が出来た時に、ここを使う生徒ばかりじゃなくて、せっかくだから、よその町の生徒も来て一緒に楽しんだらどうだろうかと思うわけです。そういったしかけ、良いものができたら、自分たちだけじゃなくて、よその町の人たちも使えるというのは良いんじゃないかなと思うわけです。さっき、そこを出た生徒達が自信を持ってと言っていたんですが、活断層があるので、地震は間違いなくもって行けますから。

**小林先生：**という落ちが付きましてけれど。

一昨年、私仕事で鳥取に行きまして、鳥取の環境大学というのが新しくできたのです。そのの学生さんにご飯を食べる機会があったのですがあって、環境大学と名前がつくだけあって、砂漠化をどうやって防ぐ

かとか、結構面白い、新しい話を聞きました。それで「なんでこういう不便な所にある大学に来ることを決めたの？」と聞くと小学校とか中学校の時に、今で言う環境学習みたいなもので、色んな体験をして、それがこびりついていて、結局大学選ぶ時に「環境大学」というのを選びました、というのが8割位いました。

申し上げたいことは、今工事の途中でと言う話もありましたし、できあがった時というのもありますし、考えている最中というのもあると思います。是非そういう場を子供達に見せていく、維持して見せ続けていくということが大事なかなと思っていますし、そういうことに町民の方も関係するということも見せていくことも大事なかなと思うのです。

3年位前に、村上龍の書いた13歳のハーローワークというベストセラーがありまして、大学卒業する頃になって、俺はどういう職業に就こうかと考える例が多いんだけど、そうではなくて、13歳頃の時に、将来の職業を決める情報をたくさん出した方が良いし、それを体験させた方が良いということなんです。そうすると、中学校とか高校の時に、特に高校は社会から隔離されているのですが、そういうことがなく、どんどん現実的な夢をふくらませることができるぞという本なのです。

ですから、せっかく良い機会、皆さん町民の方が何らかの形で全員、作るプロセスに参加する、工事の時に何かお手伝いするのも良いし、何かお手伝いする形でも良い、なんらかの形で町民の方がみんな様々な形で関わって、この町の文化をつくったり、エコロジーに関する技術がその中で展開される。色んな種類の技術や人間や職種があるんだということ、できあがったものはもう町の財産になる。町の人はその財産というそういう状況を維持し続ける。それはお役所の仕事、公務員のおじさんの仕事というのじゃなくて、町の財産をどうやって守っていくのかということをもみんなで考える。そういうのを子供達が目にするならば、違うあるいは新しい職業というのも覚

えつつ、先生に習う授業以外のことも学んで行けるのではないかと思います。

そういうような場には是非していただければ、とても良いと思います。

先生方もお忙しい中、時間を割いて協力して頂かなくてはならないのですが、是非そういう場を、それ以外の方にも広げて行って頂いて、良い環境だけじゃなくて、良い「町の場」を作って、黒松内が今以上に情報発信するような町にしていけたらということをお願いして、シンポジウムを終わらせて頂きたいと思います。どうもありがとうございました。

※本文は、実際の講演記録に基づいて、運営事務局が、まとめたものです。